

第 25 回日本乳癌学会学術総会

福岡、2017. 7. 13-15

DP-52-2

当院における乳がん患者に対する妊孕性温存療法の現状

Daisuke Kadogami、Yoshiharu Nakaoka、Yoshiharu Morimoto

IVF なんばクリニック

HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】集学的治療の進歩に伴い乳がん患者の生存率が改善した一方で、治療に伴う妊孕性消失が女性としての QOL 低下の大きな一因となっている。当院でも乳がん患者の妊孕性温存に取り組んでおり、その現状について報告する。

【方法】2013 年 4 月～2016 年 12 月の期間で、妊孕性温存目的に原疾患主治医から紹介となった乳がん患者 61 名を対象とした。全ての患者に原疾患治療最優先を基とした妊孕性温存治療についてカウンセリングを行い、同意が得られた症例に対して治療を開始した。これらの症例について後方視的に検討した。

【結果】症例の平均年齢は 36.1 歳(24～45 歳)であった。初診時、治療前の状態であったのが 29 例、手術後の症例が 22 例、術後放射線療法後の症例が 8 例であった。加えて、術後化学療法後の症例が 1 例認められたが、Chemotherapy-related amenorrhea(CRA)の状態であり、治療は断念した。さらに妊孕性温存治療を希望しなかった 9 症例を除いた 51 症例に対して治療を行った。症例あたりの平均採卵回数は 1.42 回であった。卵巣刺激は letrozole を併用した mild stimulation にて行った。刺激期間は平均 7.23 日(1～12 日)であり、症例当たりの平均凍結卵子数は 4.3 個(0-13 個)、平均凍結胚数は 2.69 個(1-11 個)であった。平均 PeakE<sub>2</sub>は 186.91 pg/ml であった。胚移植は 4 名に対し合計 10 回行った。2 名で妊娠を認め、その内 1 名は妊娠 9 週で流産となったが、現在 1 名が妊娠継続中である。

【結論】治療を開始した全症例で、原疾患治療を遅延することなく、生殖補助療法を行うことが可能であった。一方で妊娠を希望されたが CRA のため困難であった症例も存在し、妊孕性温存の必要性について、より一層他科や他院との連携や社会への周知が必要であると思われた。